

令和4年度

目黒日本大学中学校

入学試験問題

国語

試験時間 50分

注意事項

- 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- この問題冊子は、全14ページあります。
- 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図がありましたら、解答用紙を取り出してください。
- 解答はすべて解答用紙の決められた欄らんに記入してください。
- 試験中に質問がある場合は、手を挙げて監督者かんとくしゃに知らせてください。
- 試験終了後、監督者の指示にしたがって解答用紙を提出してください。
- 解答用紙に、受験番号・氏名を記入してください。
- 解答は、特に指示がないかぎり、句読点や記号をふくむものとしします。

受験番号	氏名

一

次の各問いに答えなさい。

問1 次のぼうせん部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- ① 老人を敬う。
- ② 若干のさびしさ。
- ③ 車窓からの風景。

問2 次のぼうせん部のカタカナを漢字で答えなさい。

- ① ユウビンポストに入れる。
- ② 初日の出をオガむ。
- ③ 期限をノばす。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本語の「個人」とは、英語の *individual* の翻訳で、一般に広まったのは明治になってからである。しばらくは「一個人」と訳されていた。

individual は、*in + dividual* という構成で、*divide* (分ける) という動詞に由来する *dividual* に、否定の接頭辞 *in* がついた単語である。*individual* の語源は、直訳するなら「不可分」、つまり、「(もうこれ以上) 分けられない」という意味であり、それが今日の「個人」という意味になるのは、ようやく近代に入ってからのことだった。

日本人は、この概念^①を西洋から輸入したわけだが、「個人」という日本語からは、「分けられない」という原義を感じ取りにくい。そんなふうに考えてみたことがなかったという人が大半だろう。しかし、私たち「個人」の抱える様々な問題は、実は、この見えなくなっている語源にこそ隠されている。

個人は、分けられない。これは、人間の身体を考えてみるならば、当たり前前の話だ。一人の人間の体は、殺してバラバラにしない限り、分けることができない。そのたった一つの体——実体として存在している個人に、「森林太郎」だとか、「川端康成」といった名前がそれぞれついている。

では、私たちの人格はどうだろう？ 体と同じように、分けることができない、唯一のものだろうか？ 当然じゃないかと、これまでは考えられてきた。私は私、あなたはあなただ。体と同じように、その境界ははっきりしていて、色々なことを感じたり、考えたりしている自分はいつだ、と。

しかし、本当にそうだろうか？ それは、私たちの実感と合致^{がっち}しているだろうか？ 頭をまっさらにして、人間関係を観察していると、どうもそうじゃないんじゃないかという疑念^{ぎねん}が湧いてくる。

X、会社で仕事をしているときと、家族と一緒にいるとき、私たちは同じ自分だろうか？ あるいは、高校時代の友人と久しぶりに飲みに行ったり、恋人と二人きりでイチャついたりしているとき、私たちの口調や表情、態度は、随分と違っているのではないか。

それはそうだ。人間には、色んな顔があるのだから。そう言われるかもしれない。

このことと、人格はただ一つ、という考え方は、矛盾^{むじゆん}しているだろうか？ 恐らく多くの人は、矛盾しないと答えるだろう。人間は確かに、場の空気を読んで、表面的には色んな「仮面」をかぶり、「キャラ」を演じ、「ペルソナ」を使い分けている。けれども、その核となる「本当の自

分」、つまり自我は一つだ。そこにこそ、一人の人間の本質があり、主体性があり、価値がある。……

こうした人間観は、非常に強固なものである。私たちは、ウラ・オモテがある人間を嫌うし、本音と建前を使い分けるのを日本人の悪習だと考える。八方美人というのは軽薄な人間の代表で、何よりも、「ありのままの自分」でいることこそが理想とされている。

どこに行っても誰と会ってもオレはオレ、ワタシはワタシ。それこそが、誠実な人間の生き方だ。――[Y]、もう一度、実感と照らし合わせてほしい。そんなことは、果たして可能なのだろうか？ こちらはそれでいいかもしれない。しかし、相手をさせられる方は、たまったものではない。[A]と、※へきえき辟易されるのがオチだ。

人間には、一人一人、多様な個性がある。にも拘らず、相手がどんな人であろうと受け容れられる人格というのは、どういふものだろうか？ 聖人君子のような理想的な人格なのか、それとも、どんな消費者にもマッチする大量生産品のように、没个性的で、当たり障りのない人格なのか？ どちらでもなく、「オレはオレで通ってる」という人がいれば、周りが非常に寛大で、忍耐強く彼を受け容れているだけなのではないだろうか？

私はだから、人間は結局、他人の顔色を窺いながら、「本当の自分」と「表面的な自分」とを使い分けて生きていくしかない、と言いたいのではない。他者と共に生きるということは、無理強いされた「二七モノの自分」を生きる、ということではない。それはあまりに寂しい考え方だ。

すべての間違いの元は、唯一無二の「[B]の自分」という神話である。

そこで、こう考えてみよう。たった一つの「[B]の自分」など存在しない。裏返して言うならば、対人関係ごとに見せる複数の顔が、すべて「[B]の自分」である。

「個人(individual)」という言葉の語源は、「分けられない」という意味だと冒頭で書いた。本書では、以上のような問題を考えるために、「分人(dividual)」という新しい単位を導入する。否定の接頭辞「D」を取ってしまい、人間を「分けられる」存在と見なすのである。^④

分人とは、対人関係ごとの様々な自分のことである。恋人との分人、両親との分人、職場での分人、趣味の仲間との分人、……それらは、必ずしも同じではない。

分人は、相手との反復的なコミュニケーションを通じて、自分の中に形成されてゆく、パターンとしての人格である。必ずしも直接会う人だけで

なく、ネットでのみ交流する人も含まれるし、小説や音楽といった芸術、自然の風景など、人間以外の対象や環境も分人化を促す要因となり得る。一人の人間は、複数の分人のネットワークであり、そこには「本当の自分」という中心はない。個人を整数の1とするなら、分人は、分数だとひとまずはイメージしてもらいたい。

私という人間は、対人関係ごとのいくつかの分人によって構成されている。そして、その人らしさ（個性）というものは、その複数の分人の構成比率によって決定される。

分人の構成比率が変われば、当然、個性も変わる。個性とは、決して唯一不変のものではない。そして、他者の存在なしには、決して生じないものである。

（中略）

私たちは現在、どういう世界をどんなふうに生きていて、その現実をどう整理すれば、より生きやすくなるのか？

分人という用語は、その分析のための道具に過ぎない。

漠然と気づいていることを、改めて考えるためには、どうしても、言葉が必要である。

「無意識の存在」を、フロイト以前の人間がどんなに感じ取っていたとしても、話題とするためには、やはり適当な用語が与えられなければならない。なかつた。

その意味では、本書の内容は、多くの人が既に知っていることである。ただ、明瞭に語られてこなかつたというに過ぎない。議論のためには、どうしても足場が必要となる。本書の意義は、それをまずは整備することである。

（平野啓一郎『私とは何か「個人」から「分人」へ』）

※接頭辞……語の前に付けて、文法上の変化をもたらしたり、意味を付け加えたりするもの。

※概念……物事の意味内容。

※平易……勢いにおされてしりごみすること。

問1 空らん X Y に当てはまる言葉として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア X…むしろ Y…ゆえに イ X…あるいは Y…または
ウ X…たとえば Y…しかし エ X…つまり Y…そして

問2 ぼうせん部①「この概念」の説明として適当なものとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間には様々な特徴ちゆうがあり、それぞれが持ち合わせている個性を尊重するべきという概念。
イ それ以上分けられないという意味を語源に持ち、人間の基本単位となる個人という概念。
ウ 対人関係において人間は相手によつて柔軟じゆうなんに態度を変え、様々な面を併あわせ持つという概念。
エ 個人という日本語からは原義が感じられず、様々な問題の原因が隠されているという概念。

問3 ぼうせん部②「そうじゃないんじゃないかという疑念」とあるが、何に対する疑念か。説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間の身体と人格をそれぞれ分けて考えることはできず、心と体は常に一つであるという考え方。
イ 人間の身体は物理的に分けて考えることはできず、実体として存在する個人にそれぞれ名前がつくという考え方。
ウ 人間の身体と人格は本来別々に存在しているものであり、それぞれ分けて観察するべきという考え方。
エ 人間の人格は身体と同様に分けて考えることはできず、何かを感じたり考えたりする自分は一つという考え方。

問4 ぼうせん部③「矛盾しないと答えるだろう」とあるが、多くの人がそう考える理由を五十字以内で答えなさい。

問5 空らん A に当てはまる言葉として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ずるがしこいヤツ イ おくびようなヤツ
ウ 面倒臭めんどうくさいヤツ エ たくましいヤツ

問6 空らん B に共通して入る言葉を本文中から抜き出しなさい。

問7 ぼうせん部④「分人 (individual)」の説明として、誤っているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 個人という名称が使われなくなつて、その代わりに現れた言葉である。
- イ 他者との関係性を通じて個人の中に形成される、パターンとしての人格である。
- ウ 芸術作品に触れた時に、自分の中から消えてゆく二セモノの自分のことである。
- エ 一人の人間が持つ複数の人格のことであり、その全てが「本当の自分」である。

問8 本文の内容として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 個人の人格は他人に合わせて絶えず変化するため、現代の人々は本当の自分を探し求めている。
- イ 人間関係が複雑化している中で、誰からも受け入れてもらえない理想的な人格を磨くべきである。
- ウ 思考には言葉が必要であり、言葉がなければ既に気付いていることもはっきりと語ることはできない。
- エ コミュニケーション能力を向上し、誰に対しても平等に接することで人間関係はうまくいく。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

当分のあいだ、爆竹※はくちくばかりやっていた。とにかく、爆竹が好きだった。音も火花も火薬のにおいも、好きでしよがなかつた。十二から十四歳さいまで、夏は爆竹に明け暮れていた。まじめで気が弱いから夜遊びはしなかつたので、学校が終わったあとから日が暮れるまでの、明るい公園にいた。駄菓子屋だがしやかおもちゃ屋で、一箱百円か二百円だったと思う。長いほうが十センチくらいの長方形の箱で、爆竹の束が二、三枚入っていた。ダイナマイトをそのままミニチュアにしたみたいな形の爆竹を、二十本ずつ向かい合わせに繋つなげた状態のものが、二、三枚。

ア

最初は、その一枚の端はじについている太い導火線に火をつけるといふ、普通の使い方をしていた。地面に爆竹を置き、ねじれた糸にライターで火をつけ、離れる。十秒ぐらい待つと、火薬が弾け飛ぶ強い音が不規則に連続して炸裂し、爆竹の塊かたまりは地面から浮き上がって火花を散らす。うっすらと煙けむりが立ちのぼり、破裂音は周りの建物に跳ね返って、その残響が耳の中に幻まぼろしみたいにしばらくある。楽しかった。白く硬い砂の上に、燃えた黒い灰が残った。

イ

そのうちに、普通の使い方には飽あきてきて、箱ごと火をつけた。安いボール紙の箱が燃えてオレンジ色の炎ほのおに包まれたあと、三百パーセント増しの破裂音が響き渡る。密度が濃こくなり、互たがいに響きあつて大きく成長した音が、公園を囲む団地の壁かべにぶつかつて消える。弾けた音は、ほんの数秒で全部消えてなくなる。それも好きだった。

ウ

最終的には、繋がれた爆竹の束を分解し、小さなダイナマイトをたくさん作つて、ひとつひとつに火をつけた。左手にせいぜい二センチくらいの大きさのミニミニダイナマイトを持ち、右手のライターで火をつける。導火線が短いから、ほんの一秒ぐらいで弾け飛ぶ。そのあいだに、すばやく投げる。投げないでた手を離すと、足下に落ちるまでに爆発した。小さいけれど、爆発は立派だった。近くにいた友たちが、きゃあ、と言って耳を塞ふさいだ。そしてみんなで大笑いした。ときどきは手や足に火花が当たつて痛かつたが、そのときだけだった。たいしたことはなかつた。

ミニミニダイナマイトもずっとやってると飽きて、やっぱりオーソドックスでシンプルなのがいちばんだと思って、四十本が連なつた一束にまた火をつけた。音と火薬のにおいが充満すると、心が安らいだ。

エ

友だちたちは、ねずみ花火とか吊つるして火をつけると終わったあとに鳥かごが出てくる仕掛しかけ花火とかパラシュートが舞まい降りてくるのとかをやっていた。ねずみ花火も、ぱん、と破裂するけれど、あんまり好きじゃなかった。ロケット花火は禁止されていたし、ヤンキーがやるものだからわたしたちはやらなかった。そのうちに、近所の人から学校に告げ口され、校区内の公園では花火ができなくなった。公園は狭せまく、見通しがよかった。団地と鉄工所と詰め込まれた建て売り住宅に囲まれていた。反り橋みたいな形の雲梯※うんでいに座って、みなりんが言った。

「昨日テレビで見ててんだけど、わたしも火炎瓶投げたりしたかったな」^①

自転車の荷台に後ろ向きで座っていたわたしも、前の日の夜に同じ映像を見た。昔のヒット曲を紹介しよつかいするのに「あのころ」として背景に使われていただけで、なんで彼らかれがそんなことをしているかなんて、一言も説明はなかった。

「火炎瓶で、なにでできてんのかな」

真まっ白く曇くもっていて日差しはなかったけれど、九月でもまだ倒たおれそうに蒸し暑あせくて汗でTシャツが背中に張りついていて、地面②に座り込んでいたぶつちが言った。シヨッキングピンクのビーチサンダルの足に、砂がついていた。

「石油やる。手についたら当分臭におい取れへんで」

「だって、やっぱりわたしらも戦わなあかんと思うねんやん。このままやったら自由になられへん」

みなりんはスニーカーの足を雲梯の間から垂らしてぶらぶらさせながら続けて言った。

「ゴルバチョフって、ええんかな」

「どうなんやろな。独裁政権終わるとか言うてるけどな。戦争せえへんかったらええわ。わたし、核戦争怖こわいから」

③「わたしらには、ほんまのこととかなんも知らされへんねんで。そういう、知らされてないってことを、もっと知らせていかなあかんと思う」

みなりんは真剣な目で、近くのブランコを馬鹿みたいに高く漕こいでいる小学生たちを見ていた。ぶつちは聞いているのか聞いていないのか、下を向いたまま硬い砂地に小石で家の間取り図を描かいていた。

「未来ってというのは今の時点ではまだないってことやから」

わたしが言いかけたら、おいー、と声が聞こえた。愛子が柵さくを乗り越えて戻もどってきた。

「三時二十分やった。アイス買いに行く？」

愛子はデニムのミニスカートのポケットに手てを突つっ込んだ。それぐらいの歳までは、また鞄かばんを持ってなくてもよかった。小銭しか持ってなかつ

た。

「今ええわ」

「花火やりたいなあ」

パラシュート好きのぶつちが、空を見上げて言った。一瞬見失った小さな紙のパラシュートが急に現れたみたいに空で見つかるときは、わたしも好きだった。愛子はラメの入ったサンダルで砂を蹴りながら、言った。

「わたしさあ、いけそうな公園発見してん。行ってみたいへん？」

「どこ？」

「三中の先の堤防のそこ」

「遠いやん」

みなりんは面倒くさそうだった。みなりんは暑いのが嫌이었다。わたしも嫌이었다。愛子がわたしの顔を見た。

「解は？」

山田解、というのがわたしの名前。

「ええよ。暇やし」

「うーん」

とぶつちがどつちとも取れるような、一応の同意を示したので、わたしたちは歩き出した。ぶつちは自分の自転車を押して歩いた。錆と真っ黒な油の染みついた鉄工所の前を通ったら、シベリアンハスキーの混ざった雑種の大きすぎる犬に吠えられて、四人で同時に驚いた。

高速道路の高架の下をくぐり、ぼつぼつと店がある通りを南へ歩いた。学校にこない子たちがいつもいるゲームセンターの前には、やっぱり愛子のクラスの男の子が二人地面に座り込んでいて目が合ったけれど、元々話したこともないしなにも言わなかった。その向こうの角のたこ焼き屋で百円の洋食焼きを二つ買って四人で分けて食べ、日陰を探しながら歩いた。

「山下さんと牛島、別れたらしいで」

「そうなん？ 最長カップルやったのに」

「塾の帰りに遊んでたんがばれたんやろ」

愛子は、とつくに知ってるという顔をしていた。みなりんはうしろで一つに適当にゴムで留めた髪を揺らして、愛子を振り返った。

「牛島って、誰かに似てない？」

「誰かって誰」

「なんやろなー、この感じ。テレビ出てるっばいけどー、あんまりかつこいい人とかじゃなくてー、おっさんかも」

「全然わからんやん」

途中の駄菓子屋で、花火を買い込んだ。

スクラップ工場の前を抜け、コンクリートの堤防の上に登ると短い栈橋があり、小さな船がひしめくように泊まっているのが見えた。魚なんか獲るわけがないので、なにを運ぶのかわたしたちにはよくわからなかった。どっちにしても、食べられないものだった。土曜日だからか、人は見当たらなかった。船がたくさんいるところはたいいてい、使われていない船が隅のほうに固まって繋がっていた。使っている船も捨てられた船もたいして変わりがなさそうで、置いてあるうちに時間が経って捨てられたということになるんだと思った。船だまり、という言葉はだいぶんあとになつてから知った。風がないから、波もなかった。運河からコの字型に奥に引込んで水たまりみたいな場所だから、風があっても波は起こりそうになかった。重油のにおいがした。向こう側の堤防のところにはプレハブの事務所が並んでいた。

「ええやん、ここで」

ぶっちは堤防の手前に自転車を止め、白いポリ袋の中の花火を覗いた。

愛子は公園だと言ったけれど、道路と堤防の間の中途半端に空いた場所だった。幅二メートルくらいの細長い土地が堤防が曲がる角まで続いていた。こんなところでどんな人が座るのか、コンクリートのベンチが二つあった。草も生えていなかった。わたしたちは、その一つの上を買ってきた花火を広げた。

「これ、いこか」

みなりんが筒形の火花を地面に置き、導火線に火をつけた。うしろに下がり、金色の火花を散らす導火線を見つめているうちに、筒の天辺から緑色の火花が噴き出した。しゅうしゅうと音をあげ、火花はどんどん高くなり、わたしたちの背を追い越した。火花は赤に変わり、次の瞬間には、力無くしぼんで消えた。ねずみ火花を三個ぐらいやってから、爆竹の箱を開けた。火薬のにおいが染み込んだボール紙を鼻に近づけると、懐かしかった。左手で爆竹を持ち、右手のライターで火をつけた。導火線がちりちりと燃えるのを二秒ほど見てから、堤防のほうへと投げた。一瞬の沈黙の

ち、堤防の手前に落ちた赤い爆竹は炸裂し、ぱんぱんと連続して音が弾けた。向かいの倉庫やスクラップ工場の壁に跳ね返って白い空へと音が広がっていく。⑤ 感触は、体の内側から血が溢れ出すみたいに気持ちが悪かった。

「なにしとんじゃ、どこや思とんねん」

野太い怒鳴り声が響いた。スクラップ工場の二階の窓が開き、裸のおっさんが腕を振りあげていた。

「どこや思とんねんて言うとんねん、ええ、おまえらじゃ」

わたしたちは慌てて残りの花火をポリ袋に戻し、頭を下げた。おっさんはガラスが割れそうなくらいの勢いで窓を閉めた。降りてきたらどうしようかと思っただが、そのあとは静かだった。

堤防の上に立って、水面を見下ろした。濁った深緑色の中に、小さな黒い影がいくつか動いているのが見えた。円を描くように、群れは同じところを回っていた。

「魚、おるんや」

「フナらしいで。にいちゃんが言うてた」

堤防に座り込んでいた愛子が小石を投げると、黒い影はゆっくり離れていった。こんなところでも生きていける魚がいることで、生命力に感動するというよりは、かなしい気持ちになった。水面では浮いた油が七色に光り、底から湧き上がってくる得体の知れない気泡がぷちぷちと弾けていた。

「どこ行く？」

「どこ行こか？」

堤防から降り、わたしたちは大型のトラックが行き交う道をまた南へ歩き始めた。

(柴崎友香『ピリジアン』)

※爆竹……紙などの筒に火薬をこめて並べ、その端に火をつけ次々に筒が爆発するように仕掛けたもの。

※雲梯……水平や半円状の金属製のはしごを懸垂して渡っていく遊具。

※火炎瓶……瓶などの容器にガソリンなどを詰め、投げつけて燃え上がる仕掛けを施した武器の一種。

問1 次の一文は、本文中の□ア□□エ□のうち、どこに入るか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

◆三枚を順番に繋げたり、三箱ぐらいいつぺんに燃やしてみたりもした。やりすぎると飽きた。

問2 ぼうせん部①「わたしも火炎瓶投げたりしたかったなー」とありますが、「みなりん」の心情として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 火炎瓶を花火のようなものと勘違いしているため、投げて遊んでみたいと思っている。

イ 火炎瓶を武器に戦うことは、自分達の置かれている状況から解放される手段だと思っている。

ウ 火炎瓶を投げることで、夏の暑さで溜まったストレスを発散したいと思っている。

エ 火炎瓶は核兵器のように、他人を怖がらせて脅すために使えると思っている。

問3 ぼうせん部②「地面に座り込んでいたぶつちが言った」とあるが、「ぶつち」はどのような人物として描かれているか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 情報通で、学校内の恋愛事情や遊べる場所がどこにあるかといったことに詳しい。

イ 行動力があり、率先してみんなを引っ張ることのできるリーダーシップを持っている。

ウ マイペースな性格で、何かを話し合う場面でもどつちつかずな言動をとっている。

エ 心配症で、グループで行動しようとするときも慎重に選択するようみんなに促している。

問4 ぼうせん部③「みなりんは真剣な目で、近くのブランコを馬鹿みたいに高く漕いでいる小学生たちを見ていた」とあるが、「馬鹿みたいに」と表現しているのはなぜか。理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 純粹な気持ちで遊びを楽しんでいる小学生たちを懐かしく思っているから。

イ 何の悩みもなさそうに遊んでいる小学生たちを無邪気だと思っているから。

ウ 周囲の迷惑を考えずに大騒ぎしている小学生たちを鬱陶しく思っているから。

エ 怪我の危険を顧みずに遊んでいる小学生たちを愚かだと思っているから。

問5 ぼうせん部④「いけそうな公園」とは具体的にどのような公園か。二十字程度で説明しなさい。

問6 ぼうせん部⑤「体の内側から血が溢れ出すみたいに気持ちが悪かった」とあるが、表現の特徴を説明したものととして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 直喩を用いて、ささやかな喜びを表現している。
- イ 擬人法を用いて、生々しい生命力を表現している。
- ウ 擬人法を用いて、清々しい爽快感を表現している。
- エ 直喩を用いて、湧きおこる興奮を表現している。

問7 ぼうせん部⑥「濁った深緑色の中に、小さな黒い影がいくつかが動いているのが見えた」とあるが、この時の「わたし」の気持ちとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自然の生命力を感じさせる環境の中でたくましく生きている魚たちと、弱々しい自分たちを比べてみじめな気持ちになっている。
- イ 油が浮くほど汚染された水質に気づかず平然と泳いでいる魚たちを見て、自分たちも強く生きていこうという気持ちになっている。
- ウ 見通しの悪い環境の中で行く当てもなく泳いでいる魚たちと、途方に暮れている自分たちを重ね合わせてつらい気持ちになっている。
- エ 不気味な光景の中でうごめく正体のわからない影を見て、自分たちの平和な日常が脅かされるのではないかと不安な気持ちになっている。

問8 本文全体の特徴を説明したものととして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「わたし」が子ども時代を回想しながら、単調な文体で当時の思いや出来事を語っている。
- イ 爆竹の様子や町の風景を、最低限の簡潔な表現で描写していくことで読者の想像をかき立てている。
- ウ 直接的に感情を表現する言葉を避け、情景を描くことによって「わたし」たちの気持ちを表している。
- エ 物語全体に不気味な空気を漂わせる表現がちりばめられており、主人公の底抜けな明るさが際立っている。

四

次の各問いに答えなさい。

問1 ①・②の□にふさわしい言葉を後から選び、ことわざを完成させなさい。

① まな板の□

ア こい イ かい ウ ぶた エ とり

② 竹馬の□

ア 会 イ 集 ウ 友 エ 鞍

問2 次の空欄にあてはまる言葉を後から選び、記号で答えなさい。

① 宿題を（ ）に済ませてしまった。

ア おぼつかず イ おざなり ウ かたくな エ あからさま

② このやり方は（ ）ではなく、時間がかかり過ぎる。

ア 創造的 イ 合理的 ウ 横断的 エ 開放的

問3 次の文章の中から正しく文節に分けられているものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 私／の／趣味／は／読書／を／する／こと／で／特／に／好き／な／本／は／小説／です。

イ 私／の／趣味は読書／を／する／こと／で／特に好きな本は小説です。

ウ 私の／趣味は／読書／を／する／こと／で／特に／好きな／本は／小説／です。

エ 私の趣味は／読書／を／する／こと／で／特に好きな本は／小説／です。

問4 次の文章のぼうせん部のうち、意味が異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 母におつかいを頼まれる。

ウ 友達と交差点で別れる。

イ 突然の大雨に見舞われる。

エ 人から笑われることはしない。

以下余白

—